

幼いころからかしかかった兼載は、お坊さんの修行をするかたわら、近くの諏訪神社に出かけて、連歌の会にも顔を出すようになりました。

連歌というのは、短歌の五七五・七七の句を二つに切つて、上の句と下の句をたがいに別の人が集団でよみあう芸術です。それにはいろいろな法則があつて、主に百句（百韻といひます）を、一座の共通のイメージでそれぞれ付け合つて作りあげていくものです。『発句』とよばれる最初の句をよむと、そのイメージに従つて他の人々がつぎつぎと『附句』とよばれる句を付けていきます。やがて、これが俳諧といわれるような内容になり、その俳諧の発句だけが後に独立して俳句になつていきます。しかし、それは兼載から百五十年くらい後の江戸時代になつてからです。

短歌が昔から貴族を中心によまれてきたのに対して、連歌は新しい階級である大名や、武士、町人の間でもさかんになつていきました。そして、京都から